



Title	編輯を終へて
Author(s)	山本, 檣信
Citation	懷徳. 1943, 21, p. 48-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89108
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

の哀辭を左に掲げて置きます。

哀 辭

嗚呼公世家ノ休光ヲ掲ゲ、其ノ德厚ク其ノ勳
隆シナリ、曩ニ公阪府ニ尹タリシ時、敝會ガ
舊庠ヲ重建セント欲シテ、狀ヲ具シテ稟陳シ、
公地ヲ假ランコトヲ請フヤ、公ハ欣然トシテ
之ヲ府會ニ諮リ、即チ允許ヲ賜ヘリ、爲ニ敝
會ノ經營亟ニ成リ、絃誦復タ興ルヲ得タリ、
是レ偏ニ公ガ學ヲ好ムノ懋德ニ賴ルモノニシ
テ、其ノ鴻恩永ク敝會ノ忘レザル所ナリ、而
シテ公冠ヲ挂ケテ京ニ還ルト雖モ、公ハ其ノ
評議員タル故ノ如ク、時ニ教言ヲ賜ヒ、マタ
新年ノ讌、公洛ニ在レバ必ズ駕ヲ枉ゲ、竊ニ
樂ム所アルモノノ如シ、敝會モ亦其ノ警歎ニ
接シ、壽ノ彌高カラシコトヲ祈リシニ、詎ゾ

圖ラン忽チ訃ヲ聞ク、往年ノ感荷ヲ想ヒ悼惜
ノ至ニ堪ヘズ、茲ニ虔シク哀誠ヲ布ク。

編輯を終へて

幹事 山 本 檣 信

畏みて大御心を奉體し、億兆一心、全力を盡
して、自惚の強い敵國米英の非望を根こそぎ叩
きつぶし、以て大東亞共榮圈體制を確立して、
皇威八紘に洽き世界を顯現し、唯々、宸襟を安
んじ奉らんことを念願するのみである。此の大
事に挺身するこそ、大海の一粟の如き、みたま
われらの存在を、無窮の生命に顯揚する、唯一
筋の道である。

盡忠至誠の將士は、風行雷動、求敵必殺の威
武を發揚し、寒風怒濤の中、或は酷熱彈雨の下

粉骨碎身、默々として各其の任を完うし、不惜身命、遂に國に殉じて散華せる英魂は、護國の神靈となりて悠久の大義に生く。長城に照る月も、ガンヂス河に宿る月も、月に變りなく、南の空に戰死された山本元帥の心も、アッツ島に玉碎された一兵卒の心も、國を思ふまごゝろに二つはない。將兵は、巨大な一つの火の玉となつて戰つてゐる。

一億銃後の臣民は、將兵の尊い犠牲を心に銘記し、一發の彈、一臺の飛行機でも、より多く戦線に送るべく、一粒の米でも、より多く作るべく、精魂を傾け、默々として働いて、日本を守つてゐる、其の尊い姿を、工場にも農村にも到る處に見受けらるゝ今日、千里の道も萬里の波濤も意に介するに足らない。萬難交々襲ひ來

りて、太平、印度兩洋の波、如何に荒るゝとも日本は必ず勝つ。東亞の危機に大東亞を護るため、身を挺して刻苦し、率先垂範、眞つ先に飛び込めば、道自ら開け、十億東亞の民衆は、日本の信義に頼るやうになつて來つゝある。神慮洵にかたじけなき極みである。

此の戰爭に勝つためには、石に嚙りついても頑張らねばならない我等は、純潔を必要とすると同じやうに耐乏を必要とするが、耐乏の生活には無上の喜悅を發見する。其の心の糧は眼からも耳からも攝取される。道義大阪の根元として、世道人心に貢獻して居る本堂將來の使命の重大なる事を痛感する。

本堂關係諸先生の論說と關係記事とを掲載して刊行する本誌は、號を重ねること二十一、茲に

國學の權威、澤瀉久孝先生、並びに本堂先賢の後裔羽倉敬尙氏及び會員諸子の玉稿を掲げ、附するに本堂及本會の記事を以てした、世界戰亂の今日、本號を漸く刊行し得るは、全く 聖代の餘澤にして、只管 聖恩の有難さに感泣する。

早春の候、高齢とはいへ猶矍鑠、日常より百歳壽命説を主張されてゐた中井木菟麻呂先生を喪ひ、堂友集ひて天満橋畔の會堂に其の靈を弔ひしに、盛夏の頃、またもや本堂再建の恩人大久保利武侯爵の薨去に遇ふ、眞に哀悼の至に堪へない。故永田理事長の遺命に隨ひ。太田幹事、會員を代表して上京し、告別式に列し、哀辭を捧ぐ。謹みて兩先生の御冥福を祈る。

終りに、諸先生の御鞭達と堂友諸兄の御健闘とを祈る。

